

# 南方（ハルマヘラ）

## ハルマヘラ飛行場設定大隊

### 戦傷第一号

愛知県 岸 勝 一

大正十一（一九二二）年六月八日、岐阜県加茂郡美濃八尾村で生まれ、昭和十七（一九四二）年徴集兵として、昭和十七年六月徴兵検査を受けました。当時は大東亜戦争勃発半年余という時でしたので、検査場の雰囲気も、何か違った緊張したものであったことが思われます。結果は予想通り甲種合格と徴兵官からい出されます。特に緊張し「いよいよか」といった気持ちを持ち、特に緊張し「いよいよか」といった気持ちを記憶しております。

入営は、翌十八年四月十日、静岡県浜松の高射砲第七十二連隊であり、名古屋防衛のための笠寺高射砲第三中隊陣地でありました。初年兵教育は砲の教育ではなく、兵隊としての一般教育が三カ月間、この教育が終わってから陣地における高射砲教育でありました。

この陣地は笠寺観音の裏の台地でありまして、文字通り名古屋市防衛の重要な陣地だと上官に教えられ、我が家のある名古屋を直接防衛する任務だと、重い責任を感じたのもこの時でありました。

笠寺陣地には、七・八ミリ高射砲が三門装備され、このような陣地が、名城公園等四カ所にあり、実地訓練はこの陣地で行われました。初年兵教育は酷しいと言われておりますが、私の戦友は先任上等兵で、良い人でありましたので幸運でした。初年兵時代というの

は、戦友によって随分違うのです。

十月に、第十九野戦飛行場設定隊が、豊橋工兵隊のところで編成されました。私は、高師カ原に一カ月半位いて、次には、長野県の伊那谷の辰野に飛行場を設定するというので一カ月位いたのですが、飛行場は出来ずに、今度は栃木県宇都宮で飛行場建設ということになりました。

私は、転庄機という、ローラーの運転という任務で、班長以下五人でしたが、兵舎は小さく狭い所なので人数が多いので、寝ることも出来ないし、重労働なのに風呂に一回も入らないという酷しい作業と生活がありました。

三月に野戦へ行く命令が来ましたが、部隊長が将校でも下士官でも軍刀で殴り、食事も自分だけが良い物を食い、兵隊の給与はひどいというものでした。そのため、近所の人々が気の毒に思って差し入れをしてくれました。

転庄機の班は五人、班長は淡路の人で、何もしない

ので私が代行することになり、私はかえって助かりました。転庄機が作業の中心となるのですが、回転が遅いから、作業は夜の九時頃までかかるので班内の者は苦劳しました。その間、しらみがわいて、南方まで体と一緒に行ったので、船の中でも、現地でもしらみに苦劳しました。

宇都宮では三月から四月過ぎまで作業をし、五月頃門司で民宿、本隊は昭和十九年六月初旬に門司港から「対馬丸」という貨物船で出港です。船底を三段にし、初年兵は奥の方、階級順で前の方へ、二晩目に、私はじめ七人に残れという命令が出ました。

船には、四十九輻の重機が積めず残されました。そのため、我々は十二日間門司にいました。隊長は年配の少尉の人でしたが、金は無くなるので軍指定の旅館に移りましたので、かえって接待は良かったのです。

車両四十九台を積んで出港、船底に入り、車両の修理をしていました。物資はあったのですが、車両の中の寝泊まりでしたので、他の部隊とは別でした。他は将校でも乾パンだったが我々その点では給与は良

かったです。

門司出港後、台湾近くになると、敵の潜水艦が出るようになりましたので、台北に寄港。高雄では米軍の偵察機が来ると、その後に潜水艦が来襲します。ハルマヘラへ入る二日前に魚雷攻撃を受けました。前部が高射砲、後部に山砲を仮設しておいたのですが、射撃をするが命中しない。特に高射砲は上へ向かって射つものですから水平射撃は駄目でした。

台湾から、フィリピンのマニラへ、そこで二泊しましたがその時は幸いに空襲はありませんでした。十九隻の船団は、その後バラバラになってマニラから出港して行きましたが、雷撃を受け轟沈する船も見ました。私の船も船尾の方へ魚雷五発撃たれたのですが、そのうち一発は当たり、二発目はかわすことができました。六月の何日であったか思い出せません。

部隊の本隊は先航し、我々は車両と一緒に後送でしたから、本隊の様子は分からなかったのですが、随分

ひどかったと思います。

マニラから、ハルマヘラへは島の間を縫って行ったので、一週間位かかったと思います。その間、我々はどこへ行くのか分からず（初めは濠州要員と聞いていた）、まして我々後送部隊は、車両のみ四十九両積んでいるだけで、兵器は何一つ持たずの丸腰でしたから随分不安でありました。

他の部隊は満州から南方へ増員派遣された戦闘部隊で、ト士官が飯上げをしていたのでした。その人達はその後随分苦労し、多くの人が戦死したのではないかと今でも思い出します。

ハルマヘラ島に上陸したのですが、原住民はほとんど居らず、本隊の人達が出迎えに来てくれました。宿舎は棕櫚の木を割って、それを敷いて床として、その上に、いろいろな葉を敷いていました。毛布などもちろん無い、着たきり雀の状態であります。

赤道の下だから温度は暖かい、スコールが時々来るので屋根には椰子やバナナの葉を葺いていました。

飛行場の設定は、先遣の本隊が六月頃から始めてお

り、我々は遅く到着し、ローラーの担当だったのは前に申した通りで、飛行場の滑走路作りでした。しかし、自給自足で食べる物が無いのだから、本業は中々はかどらない。そのため、周りに土盛をして、その中に飛行機を入れて置く掩体壕えんたいごうのようなものを作っている。

連合軍の空襲は、昭和十九年八月二十三日が最初でありました。連合軍はハルマヘラ島の入口のモロタイ島へ上陸を強行したのです。敵は上陸する時、徹底的に猛烈な砲爆撃をする。猛爆であり、盲爆でもある。その場所の日本軍を全滅してから上陸という手段らしいのです。物量の多さは、我が軍では考えられぬ程のものでした。そのため、モロタイ島の守備隊は玉砕したのでした。

我々の部隊は、飛行場設定作業より、食糧生産が主とならざるを得ません。その間、部隊長の方針は先に申したように過酷なもので、部下の将兵は奴隷と同様の生活でした。作業が遅れると、大隊長でも叩かれ

る。作業は徹夜でも強行、ただ「やれやれ」と強行させられる。

月の一日、十五日は、米粒と葉が少々、その他の日はタピオカを食べるようになりました。食糧は無く、作業はしろ、機械はあっても資材なし、工兵隊は手榴弾を作り魚を捕る。そのため漁労班で怪我をした者も多くいました。その後、片山部隊長は怪我をし、熊谷中佐が隊長となり、その後は状態も改善され、食糧も自給するようになりました。

その間、空襲はありましたが、宿舎は少ないのですから余り多くはありませんでした。しかし、先程話をした、モロタイ島占領の時は実にひどかったのです。戦後聞くとところによると、東部ニューギニアを占領した日本軍に対し、連合軍は、所要場所に大部隊を上陸させ、日本軍の三個師団は各地で玉砕しながら、西へ西へと後退させられ、西部ニューギニアを拠点として守りを堅める作戦になったのでした。その一部に、我々のハルマヘラ島の部隊があったのでした。

連合軍は、西部ニューギニア占領のため、モロタイ

島を占領する作戦に出たといえます。

次に、我が部隊の戦傷第一号となった私の負傷の時の状況の話を少しします。

私は、車両に荷物を積んでいました。その時、突如連合軍機の襲撃がありました。もちろん、私達を狙っての銃・爆撃でありました。後に思ったのですが、あの時、右へ逃げれば良かったのですが、瞬時のこととて、そんな判断ができるはずはないし、左へ行つたために負傷したのです。爆弾は、私の近くで破裂しました。部隊では、私は当然戦死したものと思つていたようにでした。

爆弾の破片は、右の頬、右の胸を貫通しました。今でも右上膊部には破片が残っています。そのうち一つが去年取れたのみで、いまだ随分残つていて、今も痛みがあります。また、左足も破片が残っています。

負傷した瞬間は、棒で強く叩かれたと思うような感じでした。そのうちに、ヌルヌルと血と肉が出て来ました。その後野戦病院に入りましたが、そこでも空襲

を受けました。私自身も良く助かつたと思つていません。

そのため、熊谷部隊長も中隊長も私を大事にしてくれました。結果的には運が良かったわけですね。また、片山部隊の曹長の人が、岐阜県出身、同県人であつて良かったのです。戦地では、傷は病院の治療のおかげで癒りましたが、後遺症のため右手が上がらず、敬礼は左手であることを認められていました。

また、部隊の人は、野見上等兵が自分の命を捨てて、部隊長交替をさせてくれたことを、今でも感謝し、墓参をする人が多いのです。軍隊は、まさに「連隊」と申します。ハルマヘラの部隊の人達は、貯蔵糧秣は無く、内地からの補給もなしで作業に従事していたため、栄養失調となり、二十歳の現役兵の体重が四十キロ以下に痩せ、後から肛門が見えるという状況でありました。

部隊の兵隊の三分の二は、復員できましたが、召集された年配者、体力の弱い補充兵の人々は殆ど死んでしまいました。

ハルマヘラ島の戦友は、「春島会」という戦友会を作り、当時の苦勞をしのびながら生還を感謝し、戦没者の慰霊に心をいたしております。私も、恩欠連に入会し、傷痍軍人のことも知り、戦後、二十余年後、ようやく、第四款症と認められました。しかし、私は恩欠連の一員として、同志と共に運動を継続していません。

また、里見上等兵の記事が静岡新聞に出ている、感謝の念を強くしております。